

大和における須恵器生産の特質

植 野 浩 三

はじめに

筆者は、近年「大和における須恵器窯跡」と題した拙文を発表したことがある(植野二〇〇〇)。これは、大和の須恵器窯跡研究の基礎資料収集が目的であったため、大和における須恵器窯跡の調査史、生産に関する研究史を主にまとめ、窯跡の概要紹介と時期的・地理的傾向の整理、そして若干の検討を加えてまとめを行ったにすぎない。小稿はその統編にあたり、前稿での資料整理を基にして、大和における須恵器生産の実態とその変遷を再整理し、大和の生産の特質を検討することを目的とするものである。

いうまでもなく、大和の地は国家の発生と展開を考える場合、その中心的な地域として位置づけられる。特に、古墳時代から奈良時代にかけての大和は政権の中心地である。こうした中心地において、専門的な工人を要する須恵器生産がどのように掌握され、操業され、供給

されたかという問題は、政治・社会機構を考える上において極めて重要であり、欠かすことができない事柄である。

こうした大和の生産の特色が、当時の政治・社会的な組織の構図の一端を示すことは間違いなく、汎日本的な手工業生産の実態や位置付けを考える場合においても、比較資料として極めて重要になってくる。特に、日本の中心的な生産地である陶器窯跡群の位置づけとも関わってくるし、各地域で組み立てられている生産の展開との対比によって、中央あるいは中核地、そして地方と言ったような特色が抽出され、そのモデルの組み立てが可能になる。その一布石として、大和の実態を再整理してみようと思う。

結論的には、大和の須恵器窯跡は極めて少なく、五條地域を除いて断続的に小規模生産が少量確認できるのが実情である。ただし、八世紀後半期には、生駒山麓一帯を中心に急激に増大する。小稿では、こうした実態を具体的に把握して整理し、検討を行うことによって特色を抽出し、手工業生産の様相を明らかにしていきたい。

一、大和の須恵器窯跡

日本において窯跡の調査が行われ始めるのは、大正時代以降のことである。大和の場合もその例に漏れず、意外と早く調査が行われている。一九二三（大正一二）年、別荘の遊歩道造成のために偶然発見された生駒市乾神山窯跡を、地主の依頼で奈良女高師の水木教授が現地調査をした（上田一九二六）。作成された調査では、大和における土器製造地の初めての発見と記されているように、窯跡調査の発端とすることが出来る。二年後の一九二五（大正一四）年、上田三平が同地を再調査した。調査では、窯体の一部を確認し、多数の須恵器を発掘して報告している（上田一九二六）。

こうした大和における須恵器窯の調査、生産に関する研究史、遺跡の概要は既に前出しているので詳細には取り上げないが、その都度必要な部分は補足はしていくことにする。図一は窯跡の分布図であり、表一は、現在確認されている奈良県内の窯跡の一覧表である。現在確認されている窯跡（群）は三ヶ所に及び、全国的にも極めて少ない数といえよう。窯跡の出土遺物と参考文献は巻末に載せておく。

時期的な傾向は後で述べるが、これらの窯跡は単独のものとは数基のもの、そして一〇基前後で群集するものに分かれる。それらを仮に分類すると、以下の通りになる。番号は図一・表一と同じ。

(1) 単独窯―横井窯跡（16）、押熊窯跡（12）

(2) 数基窯―平野窯跡群（20）、三郷町所在窯跡群（今池窯跡、ツク

シ山窯跡、勢野・辻ノ垣内窯跡、17〜19）

歌姫西窯跡群（13〜15）

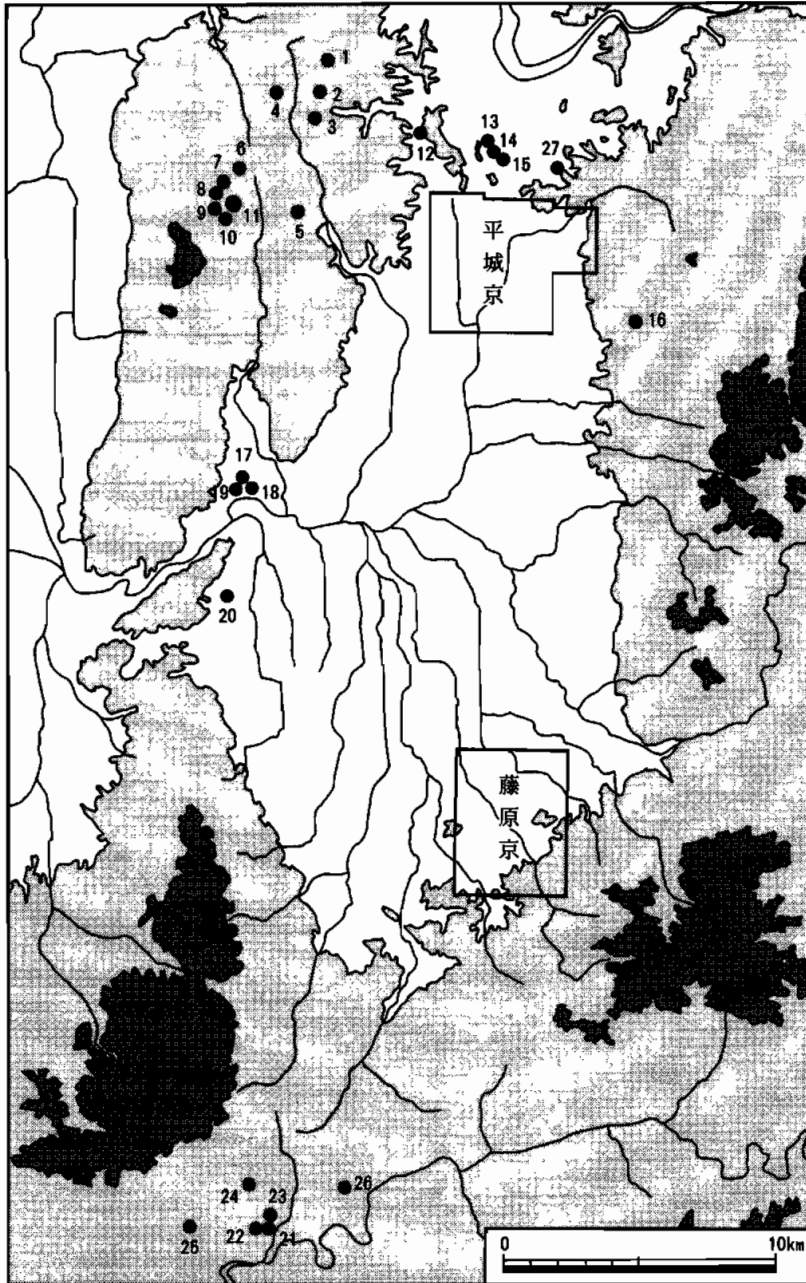
(3) 群集窯―五條窯跡群（21〜26）、生駒谷窯跡群（6〜11）、富雄川

上流窯跡群（1〜5）

これらの分類は、あくまでも須恵器窯跡の現段階での状況である。単独のものでも横井窯跡は近隣に瓦窯を伴っており、数基窯とした平野窯跡群や三郷町所在窯跡群、奈良山丘陵窯跡群の場合も同様であり、群集する五條窯跡群の場合も多くの瓦窯をかかえている。瓦窯との接点は後で述べるが、こうした瓦窯を含めると数値は変わってくる。

また、群の捉え方も多少難しい。生駒谷窯跡群、富雄川上流窯跡群としたものは、基本的に生駒谷窯跡群から富雄川上流窯跡群へとその操作が移動した状況が窺えるが、取り敢えず表記の混乱を避けるために河川域で分けた。また、奈良山丘陵窯跡群に含まれる押熊窯跡は、歌姫西窯跡群からやや距離を隔っており、かつ時期的に異なるため単独窯で捉えたが、同丘陵一帯では広範囲で瓦生産が行われており、近隣地域に所在することから包括した方がよい意見もあろう。こうした点は、その都度解釈の中で補足していきたい。

即ち、こうした分類は、単に窯跡群規模の大小のみではなく、当然全体の生産量や作業期間と大きく関係している。時期的な比定は後で



- | | | | |
|--------------|--------------|---------------------|-----------------|
| 1. 高山1号窯跡 | 9. 生駒山北方窯跡 | 12. 押熊窯跡 | 20. 平野窯跡群 |
| 2. 高山No.49地点 | 10. 北新町西窯跡群 | 13. 歌姫西窯跡群(No.10地点) | 21. 今井窯跡 |
| 3. 山田窯跡 | 11-1. 長命寺北窯跡 | 14. 歌姫西窯跡群(No.12地点) | 22. 荒木神社裏山窯跡群 |
| 4. イモ山窯跡群 | 11-2. 金比羅窯跡 | 15. 歌姫西窯跡群(No.11地点) | 23. 天神山窯跡 |
| 5. 鳥見町所在窯跡 | 11-3. 長命寺西窯跡 | 16. 横井窯跡群 | 24. 荒坂窯跡群 |
| 6. 俵口北窯跡 | 11-4. 妙心寺窯跡群 | 17. 今池窯跡群 | 25. 南仙山窯跡 |
| 7. 俵口南窯跡 | 11-5. 西松ヶ丘窯跡 | 18. ツクシ山窯跡 | 26. 阿田窯跡群 |
| 8. 薬師堂川窯跡群 | 11-6. 乾神山窯跡 | 19. 勢野・辻ノ垣内窯跡群 | 27. 瀬後谷窯跡群(京都府) |

図1 大和の須恵器窯跡の分布

表1 大和の須恵器窯跡一覧表(番号は図1と同じ)

No.	窯跡名	所在地	時期				瓦陶兼業	須恵器窯数	文献	備考
			500	600	700	800年				
1	高山1号窯跡	生駒市高山町				○		1?	木村・重見 1998	灰原調査
2	高山No.49地点	生駒市高山町				○			林部・重見 1999	窯体を含む溝状遺構あり
3	山田窯跡	生駒市高山町山田				○			錦・木村 1988、1989	試掘調査
4	イモ山窯跡群	生駒市北田原町イモ山				○	●	?	中井 1973	2群3基あり、計6基の半地下式平窯。
5	鳥見町所在窯跡	奈良市鳥見町				○		1?	白石 1977	
6	俵口北窯跡	生駒市俵口町北条				○			藤井 1983	
7	俵口南窯跡	生駒市俵口				○			吉田 1973	
8	薬師堂川窯跡群	生駒市俵口町南条				○		1	錦・木村 1988	半地下式窖窯。
9	生駒市北方窯跡	生駒市俵口				○		1	錦・木村 1988	小型平窯1基、窯状遺構1基。
10	北新町西窯跡群	生駒市北新町				○		数基	白石 1977	地下式窖窯1基。
11-1	長命寺北窯跡	生駒市俵口町南条				○			錦・木村 1988	
11-2	金比羅窯跡	生駒市西松ヶ丘				○			白石 1977	
11-3	長命寺西窯跡	生駒市西松ヶ丘				○			白石 1977	
11-4	妙心寺窯跡群	生駒市西松ヶ丘				○		2	錦・木村 1988	半地下式窖窯2基、灰原。
11-5	西松ヶ丘窯跡	生駒市西松ヶ丘				○			白石 1977	
11-6	乾神山窯跡	生駒市谷田				○		1	上田 1926	小型平窯1基、窯状遺構1基。
12	押熊窯跡	旧奈良市押熊字堂頭				○		1?	奈文研 1973	8世紀後半代の瓦窯が6基ある。
13	歌姫西窯跡群No.10	旧奈良市歌姫町				○		1	奈文研 1973	煙出部、焼成部確認。付近に8世紀の瓦窯あり。
14	歌姫西窯跡群No.12	旧奈良市歌姫町				○		2	奈文研 1973	煙出部、焼成部確認。付近に8世紀の瓦窯あり。
15	歌姫西窯跡群No.11	旧奈良市歌姫町				○		1	奈文研 1973	窖窯?全長10m。付近に8世紀の瓦窯あり。
16	横井窯跡群	奈良市藤原町横井字堂				○	▲	1	西崎他 1985	4基の瓦窯あり。1基を造替へ須恵器窯にする。
17	今池窯跡群	生駒郡三郷町勢野					▲		田中重久 1938	3基以上の瓦窯。かつて須恵器が採集された。
18	ツクシ山窯跡	生駒郡三郷町秋留				○	▲	1?	白石・亀田 1984	採集資料。瓦も同時採集。
19	勢野・辻ノ垣内窯跡群	生駒郡三郷町勢野				○	▲	1	榎考研 1996	3号窯のみ須恵器窯、他の3基は後代の瓦窯。
20	平野窯跡群	香芝市平野				○	▲	4	千賀 1982	1・4・5号窯調査。5号窯は後代の瓦窯。
21	今井窯跡	五條市今井町				○○			泉森 1987	採集資料
22	荒木神社裏山窯跡群	五條市今井町				○○○		3~	泉森 1987	採集資料
23	天神山窯跡	五條市今井町				○	●		泉森 1987	瓦を生産。1点の杯出土。
24	荒坂窯跡群	五條市西久留野町				○○	●		泉森 1987	11基の瓦窯群。1・5号窯から須恵器出土。
25	南仙山窯跡	五條市中之町寺尾				○		1	泉森 1987	採集資料
26	阿田窯跡群	五條市西阿田字高羽根				○		2	泉森 1987	採集資料

整理するが、群集窯とした五條窯跡群と富雄川上流窯跡群を含めた生駒谷窯跡群は長期間生産が継続し、数基窯は短期間で操業を終え、当然単独窯は短期・単発的な状況になる。

二、窯跡群の特徴

表一を基に、窯跡の分布傾向を地域単位で捉え、群として時期を与えて消長表にしたものが表二である。各窯跡毎に多少の型式比定の誤差はあるが、相対的な流れを見る場合には支障はない。前章で窯跡群の規模について簡単に見たが、相互を時期別に見た場合に明らかに特色が窺える。しかし、大和においては、その始まりは六世紀代であり、五世紀代に遡るものは現在においては確認されていない。

(1) 長期型の操業

この代表は五條窯跡群であろう。五條窯跡群は、大和において最も古い窯跡である。その最古例は、五條市今井窯跡、荒木神社裏山窯跡であり、MT一五型式の特徴の備える須恵器が採集されている。両窯は至近距離にあるため、一つの群として捉えられる。両窯ではTK一〇型式に近い特徴をもつ須恵器も採集されており、さらに荒木裏山窯跡ではその後の特徴を示す須恵器も少数存在するようである。従って、TK一〇型式後も小規模ながら存続していた可能性が高い。五條窯跡群で再度生産が確認できるのは、七世紀前半から後半にかけてであり、

そしてしばらく空いて八世紀の中頃の操業が確認できる。この未確認の間の操業については断定できないもの、旧宇智郡の限られた範囲で断続的に生産が行われていることから考えて、この間も継続していた可能性がもたれるのである。

五條窯跡群は大和で唯一の長期間継続した窯跡群になる。こうした状況は他所では見られない。大和とはいえども、旧宇智郡、五條地域を範囲とした状況が看取でき、一つの特徴としておきたい。

次に代表的なものは、生駒谷窯跡群と富雄川上流域窯跡群である。表二でもわかるように、生駒谷窯跡群は八世紀の中頃を境にして突如出現し、数十年継続して生産が行われた。窯跡の数も一〇ヶ所以上におよび、集中して生産が行われた様子が窺われ、他地域の状況

表2 大和の窯跡消長表

窯跡名	窯数	所 属 時 期				備 考
		500	600	700	800	
富雄川上流域窯跡群	5				----	瓦窯?あり
生駒谷窯跡群	11				----	
押熊窯跡	1			■		後代の瓦窯あり
歌姫西窯跡	3			■		後代の瓦窯あり
横井窯跡	1			■		前代の瓦窯あり
三郷町所在窯跡群	3		■			後代の瓦窯あり
平野窯跡群	4		■			後代の瓦窯あり
五條窯跡群	6	■	----	■	----	同時期瓦窯あり

とは様相を異にしている。

高雄川上流域窯跡群は、明確な窯体は未確認であるが、一部灰原の調査がなされており、生産地であることは確実である。さらにその数は増大する可能性はある。当窯跡群では、八世紀の末に近い頃から操業を開始し、一部九世紀の初頭まで操業する。現在五ヶ所で確認できるが、イモ山窯跡(4)については須恵器窯の可能性は低い。

両窯跡群の区別は、前章でも述べたように、流域別の分布から設定した仮のものであり、操業の推移を考える場合は、両窯群を大きく一群で捉える必要がある。従って、生駒谷窯跡群と高雄川上流域窯跡群は、大きくは生駒谷窯跡群から高雄川上流域窯跡群への生産地の移動が行われ、五條窯跡群ほど長期間ではないが、八世紀後半から約半世紀間の限定された期間に操業された特殊な状況が読みとれる。

(2) 短期型の操業

前述の長期間の生産地に対して、比較的短期のもの、極めて短期のものがある。前述の単独窯、数基窯である。単独窯は、当然一基の窯で操業するため、さほど長期間操業は望めない。当然操業の回数と関わってくるが、現状では比較的短期のものが多く、

単独窯では、横井窯跡と押熊窯跡がある。横井窯跡の場合は、元々瓦窯であったものを須恵器窯に改造して生産しており、七世紀後半から八世紀初頭の時期にわたる特殊な例である。押熊窯跡は、窯体・灰原等は確認されていないが、焼け歪んだものが含まれるために窯跡

の可能性が強いとした。八世紀初頭の時期であり、付近には八世紀後半期の瓦窯が六基存在する。

数基窯では、平野窯跡群、三郷町所在窯跡群(今池窯跡、ツクシ山窯跡、勢野・辻ノ垣内窯跡)、歌姫西窯跡群が存在する。平野窯跡群は、五基の窯が確認されており、そのうちの二基(五号窯跡)は、やや遅れる時期の瓦窯であるため、須恵器窯は四基となる。発掘調査されたのは一基(一号窯跡)のみであるため正確な操業期間はつかめないが、TK二〇九型式に該当し、大きな開きがないようである。

三郷町所在の窯跡群には、今池窯跡群、ツクシ山窯跡、勢野・辻ノ垣内窯跡群がある。いずれの至近距離にあり、同群で捉えてよい。今池窯跡群は、三基以上の瓦窯が主体であり、かつて須恵器も焼いていた可能性があるとするが詳細は不明である。ツクシ山窯跡は、採集資料で窯跡と確認された。TK二〇九型式からTK二一七型式の一部を含む土器相をもつ。勢野・辻ノ垣内窯跡群は四基からなり、このうち一基(三号窯跡)のみが須恵器窯である。時期的にはツクシ山窯跡と同じくTK二〇九型式からTK二一七型式の一部を含んでいる。

単独窯・数基窯とも短期間の操業が主であった。これは操業のきっかけが臨時的な突発的な状況であった可能性を示唆してくれるし、長期的操業の必要性が存在しなかった可能性や、操業の規制が存在したとも読みとれる。その是非については後章で多少触れるが、いずれにしても、短期で操業を終了しているのは明らかである。

以上のように、長期型と短期型に分けて整理したが、当然のことながら、長期型は窯の数は多くなり、見かけ上では群集する。逆に短期型は、窯の数は少ない。

三、窯跡の時期別検討と分布

以上のような成果を基に、大和における生産の動向を時期別に整理していくと以下ようになる。

即ち、大和における操業の開始は六世紀前半からであり、それは五條窯跡群に限られる。五條窯跡群では、推測を含めてそれ以降、八世紀中頃まで生産を行う長期型の典型になると考えられる。

一方、長期型である生駒谷・富雄川上流域の窯跡群は、八世紀中頃から集中的に生産を開始し、九世紀初頭まで継続する。この傾向は、五條地域と異なる要因であり、特殊な条件が考えられる。後述する平城京への供給がその要因であるが、至って計画的かつ集中的といえる。

この長期型の狭間で、大和においては短期型の操業が五ヶ所で行われている。その窯数は一〜四基にわたり、内容には統一性がない。最大の四基確認されている平野窯跡群においても、長期の傾向は見られず、いずれも臨時的な操業であり、継続していない。操業の時期は、①六世紀末から七世紀初頭、②七世紀中頃前後、そして③七世紀末葉から八世紀初頭に限られ、いずれも操業地は広範囲ではなく、限定さ

れているのが特徴である。

以上のような状況を総合的に見ると、五條窯跡群は在地に根ざした地方的あり方を示している。六世紀から一貫して、当地域が主な供給地として生産が継続された様相を示すのである。

こうした状況は既に関川尚功が「各地の地方窯成立と同じ現象として捉えられる」（関川一九八四）とするように、汎日本的なあり方である。日本における須恵器生産は第二の拡散以降、主要な地域では継続して生産が行われることが明らかになっている（植野一九九八）。

図二は、木立雅朗が作成した北陸地方における須恵器生産の消長を示したもの

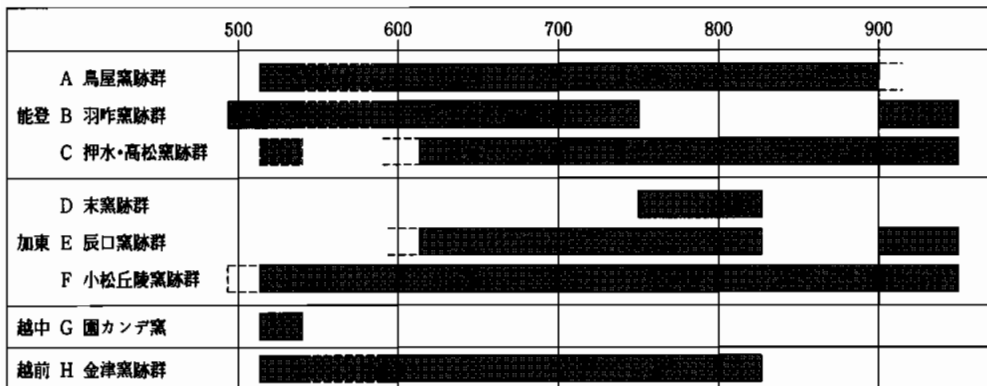


図2 北陸地方の主要窯跡の推移（木立1991より）

である(木立一九九一)。これによると、羽咋窯跡群は五世紀末葉から、その他は六世紀の前半から生産が開始し、以降継続して生産が行われている状況が読みとれる。もちろん短期のものも存在するが、中心的な生産地は長く続くことがわかる。こうした傾向は各地で認められ、北陸地方のみに限定されることではない。特に六世紀以降は、能都地方でも継続型の窯跡群が二、三ヶ所存在する可能性があり、こうした分布密度は、日本各地で確認できるのである。

しかし、大和の場合は五條窯跡群に限られるのが特殊である。本来ならば、盆地内の主要な箇所に同様の長期型の生産地が存在してもいいはずなのである。発想を変えると、大和においては五條窯跡群が特殊なのかもしれない。盆地内には、五・六世紀の大型前方後円墳が各所に存在するが、そうした地域でも生産は行われていない。葛城や布留地域、その他の地域でも確認できないのである。

これは、地理的に五條地域が紀ノ川水系に属し、大和盆地からはずれている点に起因する。大きくは大和の勢力範囲に属するのであろうが、地理的にその圏外の在地的な存在であったとしか考えられない。そのため、五條窯跡群は大和において特殊な状況に見えるのである。

生駒谷・富雄川上流域の窯跡群は、谷を隔てて生産地が移動するものの、本来は系統的に捉えるべきものである。八世紀中葉前後に突如として出現し、以後継続する。もちろん、前述の図二にある加賀・末窯跡群でも同様な傾向を示すため、こうした状況は大和のみの特殊な

例とはいえない。しかし異なるのは、末古窯跡群では、近隣地域にそれ以前の生産地が存在していることであろう。この時代は、律令体制のもとで国が組織されているため、末古窯跡群の場合は旧国単位内の動きとして理解できるが、大和の場合はそうした状況が窺えず、特殊といわざるを得ない。即ち、平城京と比較的至近距離の場所において、平城京を供給地とした生産が急遽開始されたのである。その成立要因についてはいくつかの見解があるが、それ以前の大和にこうした生産地が存在しなかった点が重要である。

四、大和における須恵器生産の特質

以上のように、大和における須恵器生産には他地域と異なる状況が存在していた。大和的でない五條窯跡群を除くと、大和での須恵器生産は八世紀中頃の生駒谷窯跡群の出現を待たないと、本格的な生産は展開していない。それが、大和における須恵器生産の特質といえよう。六世紀から八世紀にかけて数ヶ所で単発的に生産は行われるものの、それは継続性を示さない。その間の需要はどうしたのであろうか。それは前稿でも指摘したように、陶邑窯からの供給が主体であったと考えられる。生産址が存在しないことは、これを如実に物語っている。生産地を有しなくても、多量の須恵器を入手することが出来た状況が一つ考えられるし、またそうした機構の中に大和は組み込まれていた

可能性を示唆している。これは、陶邑窯経営と大きく関係する。筆者は、陶邑窯が中央政權の管掌下で生産を行っていた見解を指示する立場にある。その構図は、中央政權の配下に有力豪族が配され、その管轄下で生産管理が行われていたと予測できる。特に、その背後にある大阪平野は、吹田窯跡群までの間にほとんど生産地がなく、また陶邑窯の南部地域においても同様なのである。そのエリア内に大和も含まれていたと考えられるのである。

特に五、六世紀にかけての大王の宮や陵墓は、大和と河内において繰り返し造営されるが、手工業としての須恵器生産は形態は変えながらも、従来の供給方式が継続していたのであろう。六世紀になると、各地において生産が拡大するが、大和の場合は大きな変化が認められない。中央政權や大王家、有力豪族の直接・間接的な掌握は引き続き存在し、その流通機構が保持されたのであろう。

七世紀以降になると、政治組織の変化を生み、八世紀代になると陶邑窯でも律令的な調庸の体制の中に工人が組み込まれる。しかし、大和の須恵器窯跡のあり方は、前代を引き継ぐ傾向にある。ただし、単発的な窯が出るのは七・八世紀であり、多少在地的な生産が起こったのも事実である。特に大きな変革期は8世紀中頃の、生駒山麓一帯の生産の開始である。しかし、寺院・宮都に使用される瓦生産には、すでに飛鳥寺造宮の段階から須恵器工人が導入された痕跡が認められており、以降これは各所で認められる。こうした体制は須恵器生産と緊

密に見えるが、やはり一線が画されていた。これは特に、大和においては顕著であり、特色の一つといえよう。

藤原学・中村浩は、奈良県の須恵器生産を整理する中で、大和の窯跡数は他に比べて最も少ない地域に属するとし、これは「倭政權が須恵器生産組織を具体的にどのように把握したかという古代史上の問題」としている(藤原・中村一九九六)。まさしく同意見であり、筆者は前述した状況を考えている。しかし、両氏は一方で「奈良盆地は王權の本拠地であるにもかかわらず、大規模な直轄窯は別に陶邑窯にもち(中略)よって、大和における各窯は須恵器生産の開始期から一地方窯の範囲を脱却できなかった」としている。古代史上の問題にまで問いかけた議論ではあったが、後半ではやや異なるような見解を示しており、説得性に欠ける。むしろこうした大和の状況が本来の姿であり、特質といえる。五條窯跡群の状況や単発的な生産状況は、その一部分にしか過ぎないと考える。

五、八世紀後半期の須恵器生産

生駒山麓一帯の生産状況はやや複雑になってこよう。八世紀中頃に突如として成立し、約半世紀間にわたって生産が継続した点特徴である。この窯跡群に関しては、①生産開始の経緯、②地理的な選択の経緯、③供給先の限定、④生産量の問題等、多岐にわたる未解決の課

題を含み、これらは至って政治・経済的な要素を内包している。

大阪陶邑窯では、須恵器生産開始期から九世紀の前半にかけて生産が連続と行われているが、八世紀中頃になると急激に生産量が減少する。それ以前は、同一型式期に二〇基近い窯が操業しているが、この期を境に数基程度の数になっている。もちろん、現在確認されている窯を基準にしているため、多少の変更は出てこようが、この期を境に大きな変化があるのは大勢で認められる。

陶邑窯のこうした傾向は、律令体制に基づく生産関係の変化や、工人組織の解体等が社会的変動の中で徐々に行われ、ついには終息に至ったといわれている。そして、和銅元（七〇八）年に始まった和同開珎の発行や私鑄銭の認可他、国の銅銭流通政策により、奈良時代後半期には通貨インフレを起こし、物価が上昇している。和銅四（七一一）年には六升一文の米が、天平宝字六（七六二）年には一升七文、その三年後には一升二〇文というように跳ね上がりは急激である。須恵器の対価は一部記録に残るように、大きな変動がなく、ここにギャップが生じている。そうした点において、陶邑窯の衰退や生駒山麓の窯跡群成立の解明の糸口がありそうである。

平城宮・京の須恵器の状況を論じた巽淳一郎は、八世紀前半では比較的陶邑窯の製品が多く認められるのに対して、後半期には減少する傾向にあるとする。これは、奈良時代後半期の状況を伝えた可能性が高い「延喜主計寮式」に、大型の貯蔵具を除いて和泉国の調質量が少

なくなっている点と合致するとした。そして、焼物の特性に合わせて朝貢する器形が分けられるというような分業の存在が、調貢国間で認められるとし、「延喜主計寮式」では和泉国は大型の貯蔵具が主に朝貢された。これは、一方でインフレ対策ともいわれ、コストの割に手間のかかる小型品よりも、利潤の多い大型品を生産し、消費地に送り込んだという（巽一九九二）。

こうした点は、陶邑窯TK三一四号窯跡から出土した壺に、「施五升直銭冊文」の銘文が書かれていることから明らかである（中村一九八一）。これが、どの状況を示しているかは判断できないが、八世紀後半の少なからず米等の対価を示している可能性はある。銘文は依頼されて描かれた可能性があるが、須恵器工人もこうした対価に敏感に反応していた証拠でもある。

須恵器の調査は、律令制の開始から行われたと考えられるが、確実に確認できるのは、天平九（七三七）年「和泉監正税帳」の記載以降であるという。須恵器工人そのものを調庸的組織の中に組み込んでいき、扱いとしては一般農民と同じ状況であった。こうした体制の変化が、七世紀以前とは大きく異なっており、しいては陶邑窯の縮小にも起因しているのであろう。「延喜主計寮式」に見られる須恵器の量を員数で算出すると六六〇余人に算出され、一人あたりの生産量はただか数日分との見解がある（田中琢一九八四）。それ以外の生産品は、当然一般集落へも流通した訳であるが、前述のように須恵器自身の対

価は、物価高騰に比べて大きな変動がなかったのである。ここに生産衰退の道が用意されていたのかも知れない。

しかし、平城京東西市での須恵器売買の記録が示すように、須恵器自身は生活用具として必需品であった。八世紀後半期には、須恵器よりも比較的作りやすく、労働力の低い土師器が須恵器の割合を凌ぐようになり、須恵器の購入よりも私的な土師器工人を雇って製作する方が効率的であったとの指摘もある（巽一九九一）。

この様な状況下で、生駒谷窯跡群は生産を開始するのである。和泉国陶邑窯の生産と調査は、「延喜主計寮式」に見られるように、八世紀後半期にも継続するが、新たに都市近郊に生産地が誕生するのである。その経緯は単純ではなからうが、前記した状況が大いに関係していると考えられる。八世紀前半の陶邑窯からの供給が後半期に減少する傾向は、結果的に、生駒谷窯跡群の成立と直接的に関係していると考えられる。その後陶邑窯は、調庸としての調査は続けつつ、また河内・和泉国内での供給は行ったが、一般流通品としてわざわざ平城京に製品を持ち込まなくなったのであろう。これは、前述の通り、平城宮・京の陶邑窯の製品量や、比較的対価の高い大型品を多く朝貢することからも窺えよう。

生駒谷窯跡群の成立は、こうした意味からいえば、大量消費地である平城京の近郊であり、製品運搬の負担は軽減される。もちろん運搬時における製品の破損も同じである。こうした地理的条件が、成立の第

一番目の要素として浮かび上がる。

第二には、需要の問題がある。八世紀後半期には土師器の占める割合が増えるといえども、都における需要は高かったといえる。こうした需要を賄う必要性は、当然官司の知るところであり、調査だけでは補えない生産地の必要性が認識されたのであろうか。その経緯は不明であるにしても、現実に生産が開始しており、以後継続するのである。

その成立は、官主導とは言えない。それは、陶邑窯の変遷が示すように、最終的に一地方窯的な状況に至った経緯からもいえるし、瓦生産のように官宮工房として管轄されていないことから窺える。私的とは断定できないまでも、京内での需要に対応する形で、一族に支えられた状況下において生産が始まったと予測できよう。それは、東西市での記録に見られる須恵器の売買からもわかるように、商品としての価値を持ち流通していく。生駒山麓一帯の生産の成立と展開も、こうした背景が存在したと考えられる。事実、八世紀後半期の状況を伝えたとされる「延喜主計寮式」には、須恵器の貢納国として大和は記されていないのである。

六、都城と生産地の分布

日本における須恵器生産は、七世紀後半から八世紀にかけて大きく変動するといわれる。それは、右記した律令体制の調庸の中に工人が

組み込まれていくためであり、これは畿内の中心部、特に陶邑窯において顕著に現れる。地方においては、国衙・郡衙の領域においてその操作が支えられて展開していく状況があり、これは陶邑窯の調庸的な

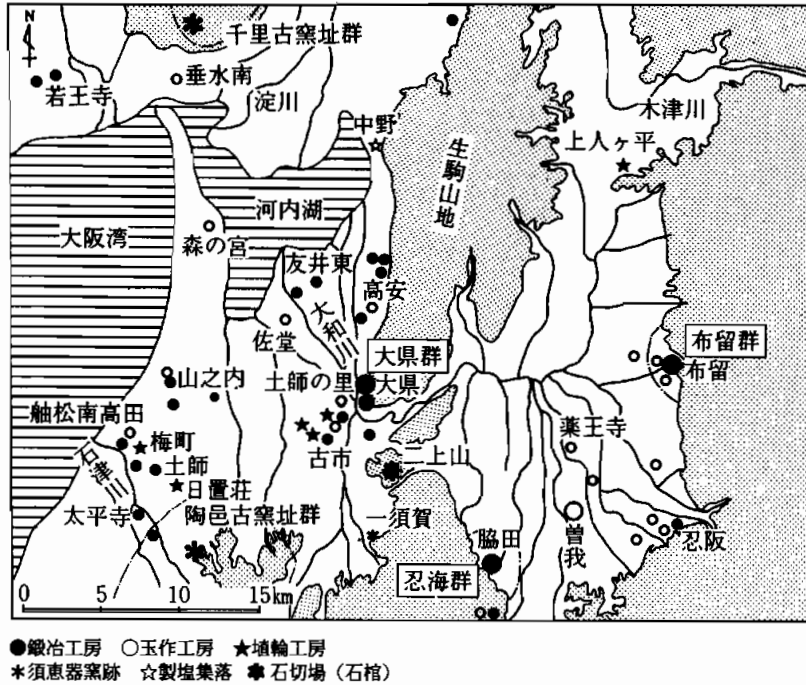


図3 畿内中枢部の生産遺跡（花田1989より）

あり方とは多少異なる。しかし、八世紀中頃から後半期にかけての国分寺・国分尼寺造営に関わる負担を経て、九世紀代には大きく体制が変化し、減少の傾向に至るのは共通している。

古墳時代では、大王の宮は各所に移動するが、大阪平野・あるいは大和盆地を拠点として、その周辺に手工業部門の生産地が配置されている（図三）。陶邑窯はその一部門であり、その他鉄器生産や、玉製作等の部門が各所に存在する。陶邑窯は、七世紀代を通して朝廷へ製品を納めており、調庸開始の具体的な検討は必要であるが、藤原京においても継続した状況を示す。つまり、広範囲ではあるが、都城成立後も旧来の生産部門と機構が継続していたことになる。

平城京に至っては、小稿で述べたように、調庸の具体的な記録が残り、八世紀の前半から多少の変革が行われつつも、生産地の状況からは八世紀の中頃を期として大きく変わっている。具体的には、平城京の近郊に須恵器生産地が成立することである。平城京北部域には早くから瓦生産を中心とする生産地が設置されていた。八世紀の中頃を期にして、割と近郊に須恵器生産部門が成立する。今回は特に触れていないが、京都府木津町・加茂町にも須恵器の窯跡群が存在する。特に加茂窯跡群は、恭仁京の造営と対比されるが、以後も多少継続しており、平城京への供給は少なからず存在したと考えられよう。この事実には、緊急性とともに、生駒谷窯跡群の例と共通する部分があり、都城近郊への生産地分布傾向と矛盾しない。

こうした傾向は平安京の状況とも似ている。平安京では、京の東・西・北方向に生産地が存在している(図四)。大量消費を行う都城を中心にして、近郊に生産地を配する形態をとり、意識的にこうした流通システムを形成したと考えられる。もちろん物の流通には、調庸形

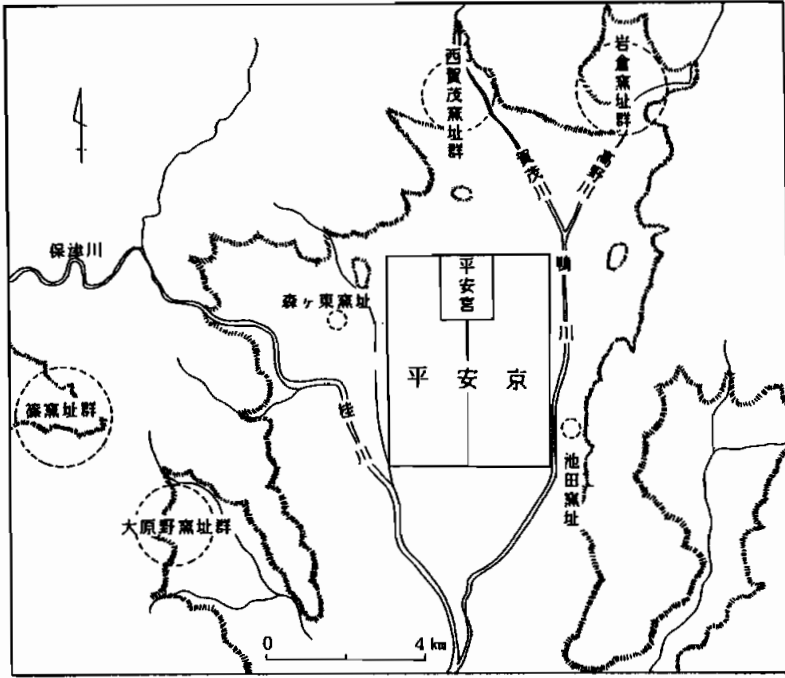


図4 平安京周辺の窯業生産地(山田1998より)

態による他国からの製品や材料があるが、大量消費に伴う物は近郊での生産によったし、その他の生産部門は京内におく場合もある。そうすると、平城京後半期の生産地の配置と分布は、平安京にも引き継がれた可能性があり、大和で成立した前段階の「都城型」流通システムがモデルになった。

広範囲であった古墳時代から七世紀代の生産地の分布拠点が、都城の成立と共に近郊に集まり、調貢品以外の大量消費物は、こうした生産地で賄われたと理解できる。

おわりに

本稿は、大和の須恵器窯跡の整理・検討を通じて、大和における須恵器生産の実態と特質を論じた。

現在のところ大和では、初出期から5世紀代の須恵器生産は確認できない。前稿でも述べたように、将来的に確認される可能性はあるが、それは単発的な操業であり、存在しても初出期のTG二二三型式段階が妥当と考えている(植野一九九三、二〇〇〇)。五條窯跡群のあり方は、全体的に見ると逆に特殊な存在になる。比較的限定された、盆地外での様相として理解されよう。

むしろ五世紀から七世紀を含めて、須恵器窯が存在しないことが大和の特徴ではないかと考える。生産地を有しなくても多量の須恵器を

入手し得た状況が予測出来る。これは前章でも述べたように、中央政権の手工業生産の掌握と関係し、陶邑窯が中央政権や有力豪族と管理下にあり、そうした政治的・社会的機構の中に組み込まれていたであろう。これに大和の地域も含まれていたため、須恵器の生産地を要しない状況が生まれた。大阪平野と奈良盆地を範囲とする流通機構が、中央政権を介して存在したのである。その機構の中で供給が行われた。それが大和の特産といえるのである。

もう一つ特徴的な存在は、生駒山麓の窯跡群の成立と展開である。古墳時代から七世紀代の特産から脱して、新たな展開を見る。それは律令体制における須恵器工人の調庸的な把握、経済的なインフレ状態、陶邑窯の衰退と関係して、労働力の負担軽減というような物理的側面や経済効果が関係して、大量消費を賄うための生産が始まったのである。それは、前代とは異なる性質を備えている。結果的にせよ、それは都城近郊での生産となり、平安京でもそうした状況が受け継がれ、「都城型」流通システムが展開する。

最後に、大和においては須恵器生産より瓦生産の痕跡が異常に目立つ。これは当然、古代寺院や宮、都城の造営と関係している。須恵器生産の関係でいえば、最古の古代寺院である飛鳥寺の瓦には、須恵器の技法を用いた瓦が存在しており、瓦の生産に当たって須恵器工人が動員されたことが分かっている。そしてこの段階以降、各所にこうした状況が認められる。五條窯跡群の場合も、飛鳥・藤原地域への供給

を行っている。五條窯跡群の場合は、須恵器生産と平行して行っている点が特色であり、前述した地方窯的な様相と似ている。藤原京の瓦を生産した大和郡山内山瓦窯跡では、須恵器製作技法を用いた瓦が多数発見されており、大量の瓦の生産には窯業に長けた工人が再編成され、操業に当たっている(山川一九九五)。

香芝市平野窯跡、三郷町勢野・辻ノ垣内窯跡、ツクシ山窯跡、今池窯跡では、須恵器生産終了後しばらくして、隣接して瓦生産が行われた。歌姫西窯跡群では、半世紀ほどの時間的経過を伴うが、押熊窯跡群では奈良山丘陵一帯で生産が開始している。横井窯跡は、瓦窯が先行するが、後に須恵器も焼いている。いずれも同時期や継続操業と言えないものが多いが、須恵器工人達が一連の瓦生産に協力したことは、同一地域に再び窯を造営する点から納得できる。

こうした状況は、七世紀の飛鳥・藤原地域を中心にしており、多くの須恵器工人が動員・吸収された。田中琢はこれを、瓦生産体制の編成とし、さらに再編成されて官営工房化したとする(田中琢一九八四)。大量の供給が必要な時は、その都度須恵器工人が再び動員されることもあった。右記の単発的な窯の工人もこれに荷担していたことは充分予測できる。平城京造営以後は多少体制が異なってくるが、七世紀代の単発的な窯跡の存在は、こうした状況を多分に含んでいると考えられるのである。

〔付記〕

奈良大学文化財学科教授であられた光森正士先生が、一九九九年三月三十一日、本学退職と同時にご永眠された。その追悼論文集が『文化財学報』一七集（一九九九年四月）として刊行された。先生の御存命中、多大なご指導を受けながら、筆者はその紙面を埋めることが出来なかった。ここにお詫びすると共に、本書を追悼論文として捧げ、ご冥福をお祈りいたします。

小稿は、既に提出した拙稿（植野二〇〇〇）とともに、一九九七（平成九）年度奈良大学研究助成（研究課題：「奈良県における古代黨跡資料集成」）の成果の一部である。

また、資料の収集および生駒山麓一帯の黨跡群の内容については、前回同様本学文学部文化財学科学生、重見泰君の協力と教示を受けた。ここに記して謝意を申し上げます。

〈引用・参考文献〉

- 泉森 皎 一九七九「五條市周辺の黨跡」『奈良県観光』第二六八号
泉森 皎 一九八七「大和の須恵と黨跡群」『横田健一先生古稀記念 文化史論叢』(上) 創元社
上田三平 一九二六「奈良県生駒町の古代陶黨遺跡」『考古学雑誌』第一六巻 第一号

石井清司他 一九九二「木津地区所在遺跡平成3年度発掘調査概要」(財)京

都府埋蔵文化財調査研究センター

植野浩三 一九九三「日本における初期須恵器生産の開始と展開」『奈良大学

紀要』第二二号

植野浩三 一九九八「五世紀後半代から六世紀前半代における須恵器生産の

拡大」『文化財学報』第一六集 奈良大学文学部文化財学科

植野浩三 二〇〇〇「大和における須恵器黨跡」『奈良大学総合研究所所報』

第八号

岸 熊吉 一九五九「大和における古代黨跡」『奈良県史跡名勝天然記念物調

査抄報』第一集 奈良県教育委員会

木立雅朗 一九九一「加賀・能都における在地黨の出現」『北陸古代土器研究』

創刊号

小島俊次 一九六五「奈良県の考古学」吉川弘文館

白石太一郎 一九七七「生駒谷須恵器黨跡群をその遺物」『青陵』No三五 奈

良県立権原考古学研究所

白石太一郎・亀田博 一九八四「三郷町 平隆寺」(『奈良県史跡名勝天然記

念物調査報告』第四七冊 奈良県立権原考古学研究所)

関川尚功 一九八〇「奈良県五條市引ノ山古墳群」五條市教育委員会

関川尚功 一九八四「奈良県下出土の初期須恵器」『考古学論攷』第一〇冊

奈良県立権原考古学研究所

箕園勝男 一九七四「香芝町平野古黨跡採集の須恵器について」『青陵』No二

五 奈良県立橿原考古学研究所

巽淳一郎 一九九一「都の焼物の特質とその変容」『新版 古代の日本』六

近畿Ⅱ 角川書店

田中 琢 一九八四「古代窯業の展開」『講座・日本技術の社会史』第四卷

窯業 日本評論社

田中重久 一九三八「平陸寺創立の研究」『考古学』第九卷第一一号

千賀 久 一九八二「北葛城郡香芝町平野窯跡群発掘調査概報」『奈良県遺跡

調査概報』一九八二年度 第二分冊 奈良県立橿原考古学研究所

中井一夫 一九七三「北田原古窯跡群」『奈良県観光』第二〇二号、第二〇四

号

中村 浩 一九八一「和泉陶邑窯の研究」柏書房

奈良国立文化財研究所編 一九七三「奈良山 平城ニュータウン予定地内遺

跡調査概報」奈良県教育委員会

奈良県立橿原考古学研究所 一九九六「勢野・辻ノ垣内古窯跡の調査」現地

説明会資料

錦好見・木村篤史 一九八八「生駒市遺跡分布調査概要」(「生駒市文化財調

査報告書」第七集 生駒市教育委員会)

錦好見・木村篤史 一九八九「生駒市遺跡分布調査概要」(「生駒市文化財調

査報告書」第九集 生駒市教育委員会)

西崎卓哉・中井公・立石堅志 一九八五「横井窯跡群の調査」『奈良市埋蔵文

化財調査報告書』昭和五九年度 奈良市教育委員会

花田勝広 一九八九「倭政権と鍛冶工房―畿内の鍛冶專業集落を中心に―」

『考古学研究』第三六巻第三号

林部均・重見泰 一九九九「生駒市高山町関西學術研究都市第三次試掘調査

報告」『奈良県遺跡調査概報』一九九八年度 奈良県立橿原考古学

研究所

藤井利章 一九八四「生駒市俵口北須恵器窯発掘調査概報」『奈良県遺跡調査

概報』一九八三年度 第一分冊 奈良県立橿原考古学研究所

藤原学・中村浩編 一九九六「須恵器集成図録」第二巻 近畿編Ⅱ 雄山閣

出版

本村充保・重見泰 一九九八「生駒市学研都市(高山一号窯)第二次試掘調

査報告」『奈良県遺跡調査概報』一九九七年度 奈良県立橿原考古

学研究所

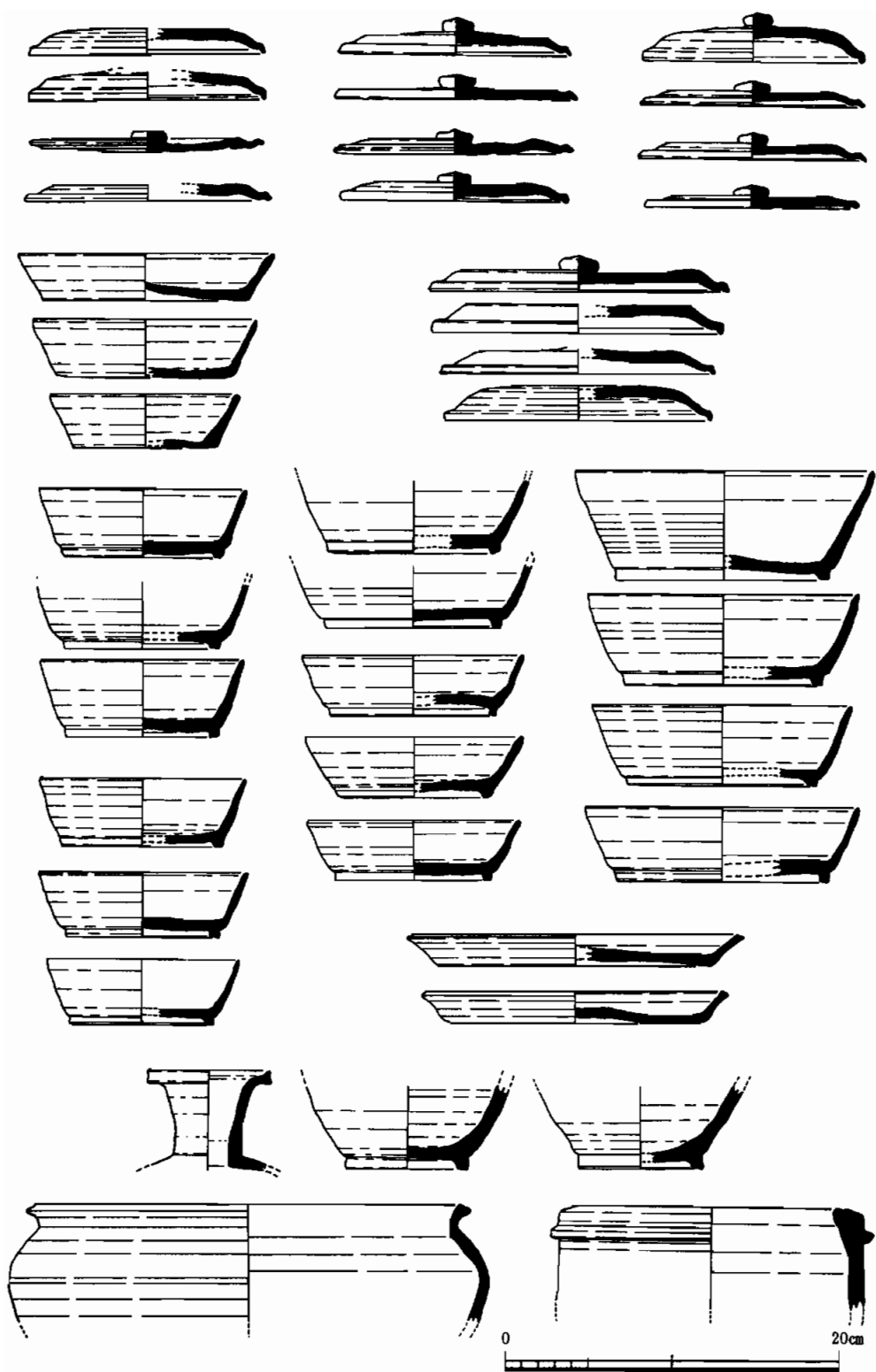
山川 均 一九九五「内山瓦窯 一号窯発掘調査概報」(「大和郡山市文化財

調査概要」三三 大和郡山市教育委員会)

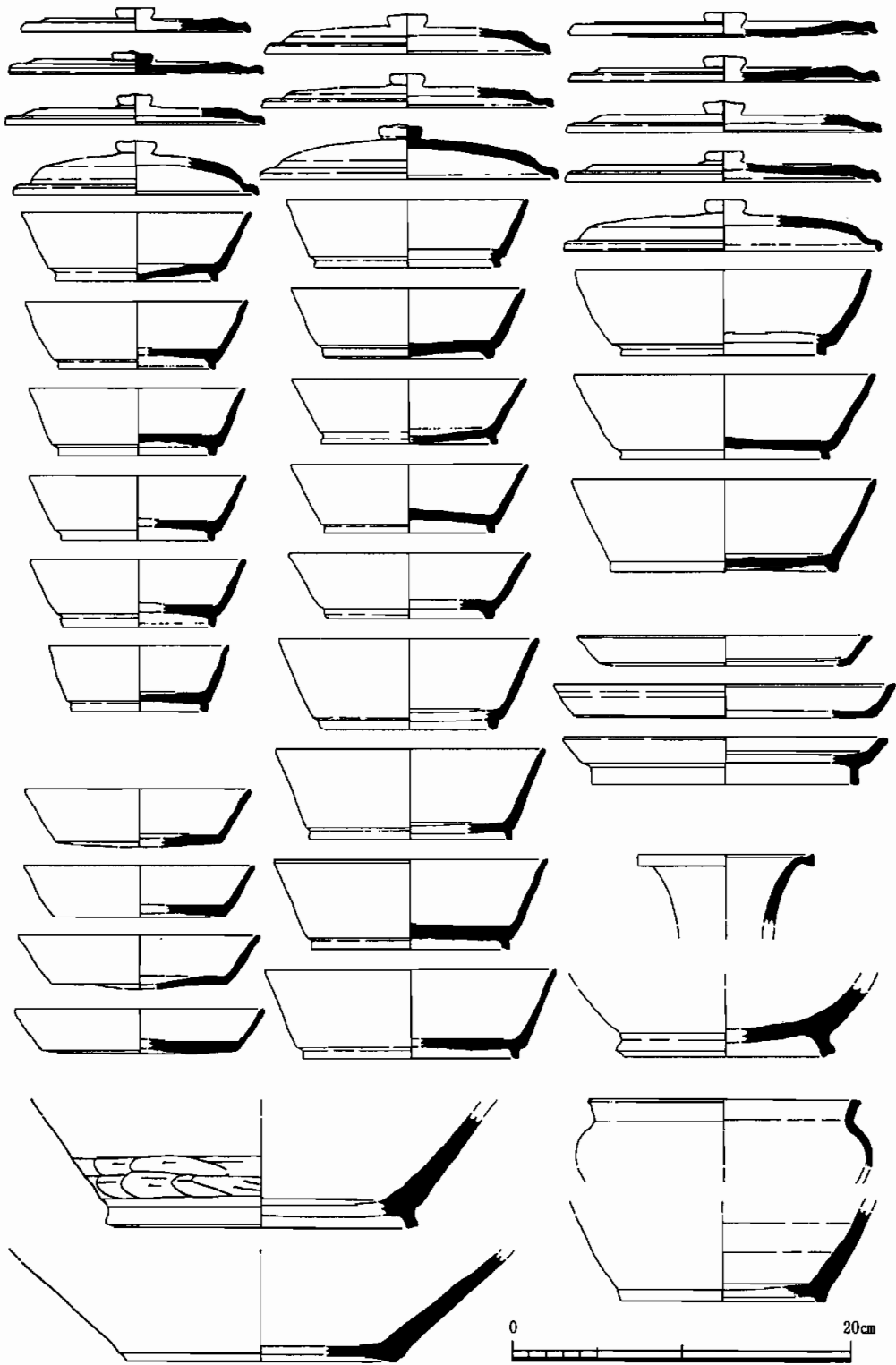
山田邦和 一九九八「須恵器生産の研究」学生社

吉田恵二 一九七四「生駒市須恵器窯出土の土器」『奈良国立文化財研究所年

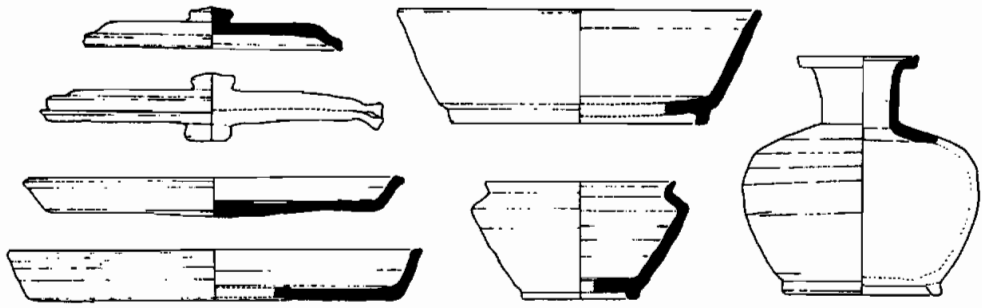
報』一九七三 奈良国立文化財研究所



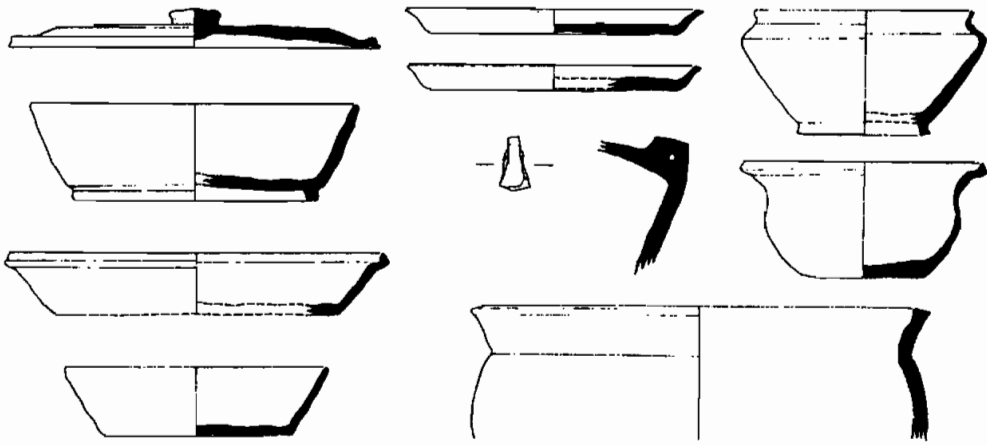
窯跡資料(1) 高山1号窯跡 (本村・重見1998より)



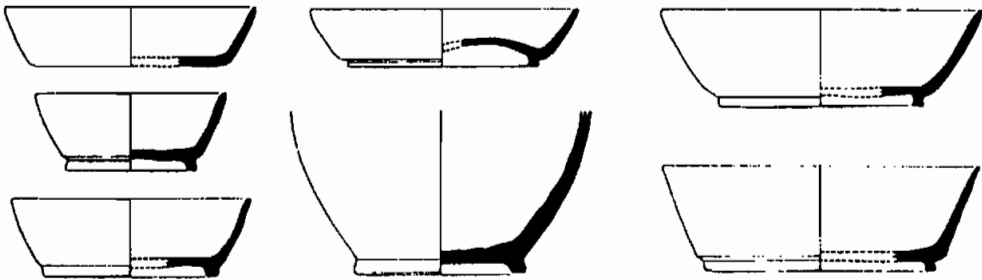
窯跡資料(2) 高山No.49地点 (林部・重見1999より)



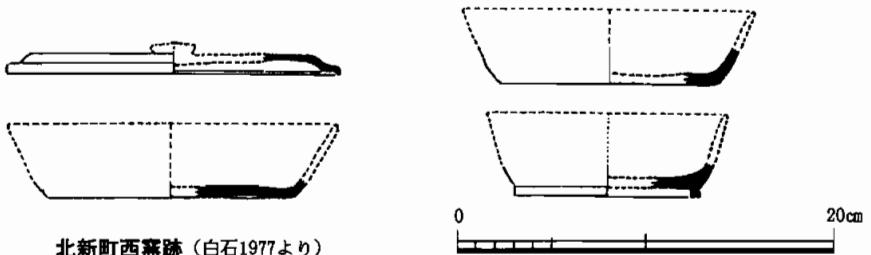
俵口北窯跡（藤井1984より）



俵口南窯跡（吉田1974より）

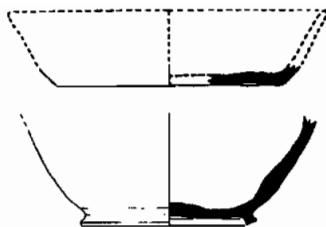


俵口南窯跡（白石1977より）

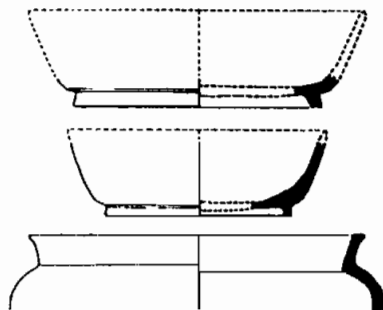
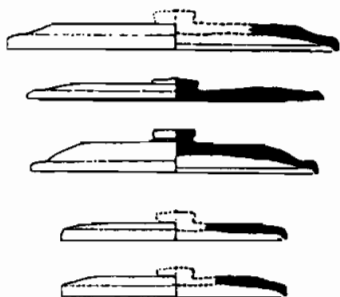


北新町西窯跡（白石1977より）

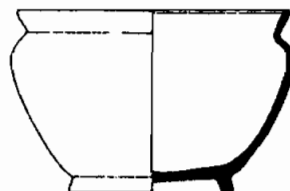
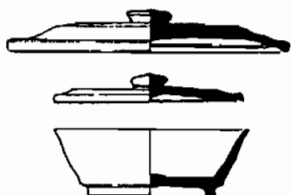
窯跡資料(3) 各文献より一部改変



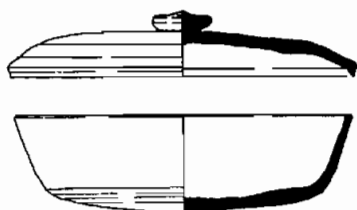
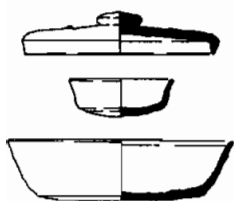
金比羅窯跡（白石1977、錦他1989より）



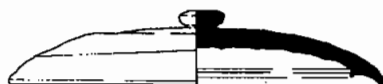
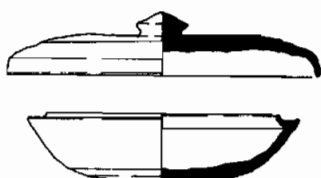
長命寺西窯跡（白石1977より）



西松ヶ丘窯跡（白石1977より）

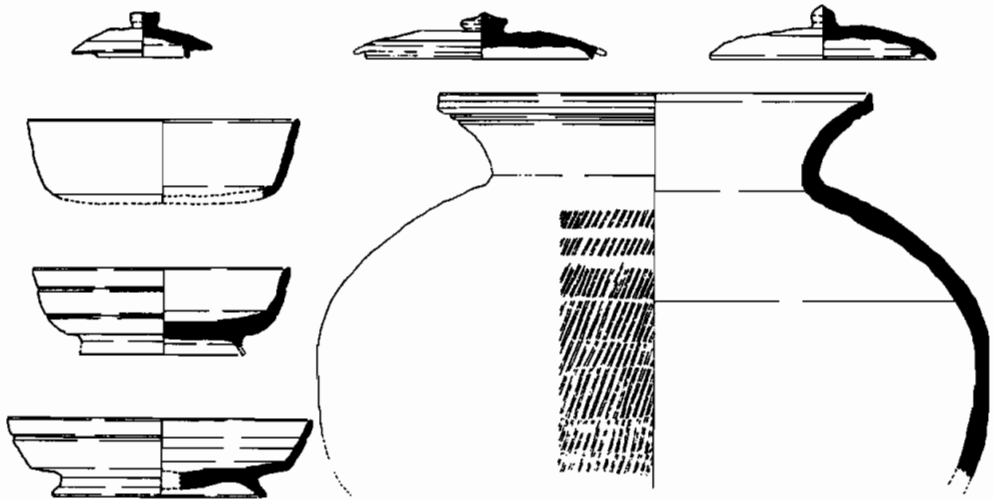


押熊窯跡（奈文研1973より）

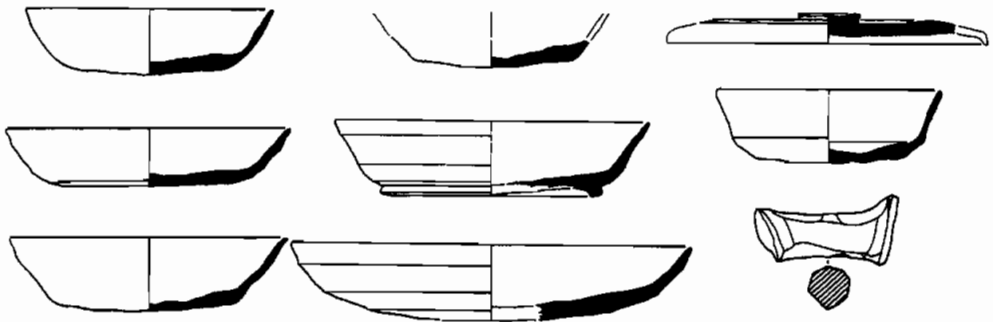


歌姫西窯跡群No.12地点（奈文研1973より）

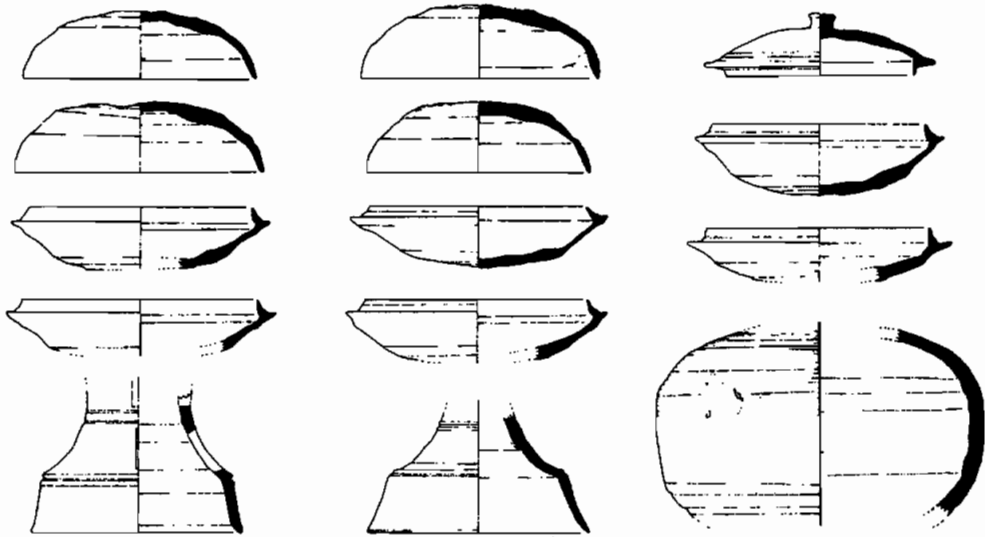
窯跡資料(4) 各文献より一部改変



歌姫西窯跡群No.11地点 (奈文研1973より)

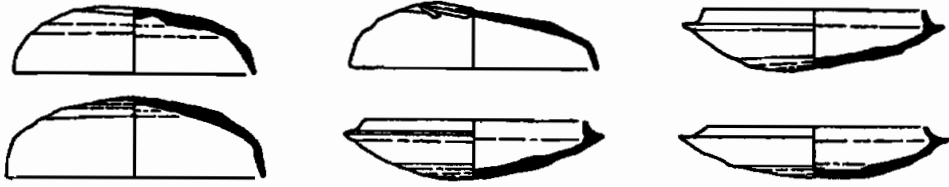


横井1号窯跡 (西崎他1985)

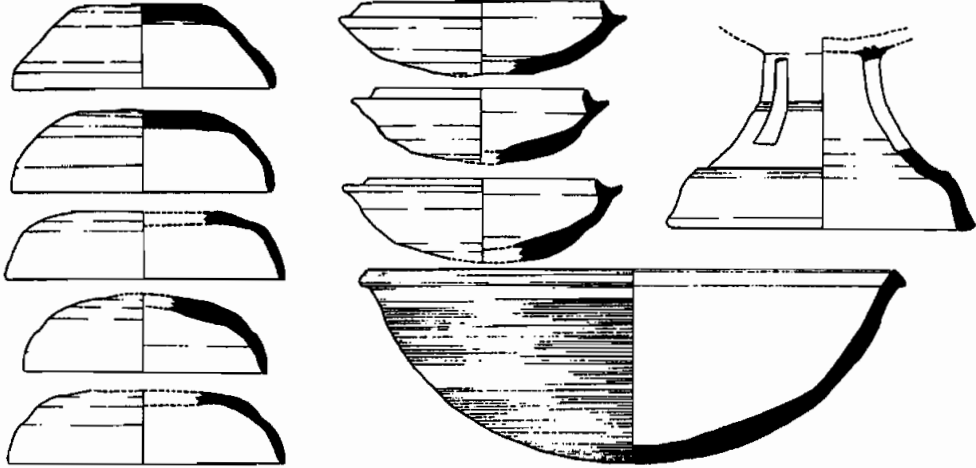


ツクシ山窯跡 (白石・亀田1984より)

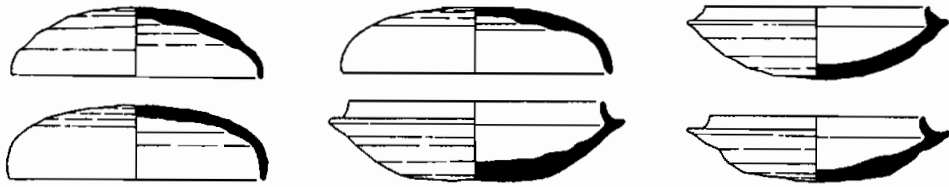
窯跡資料(5) 各文献より一部改変



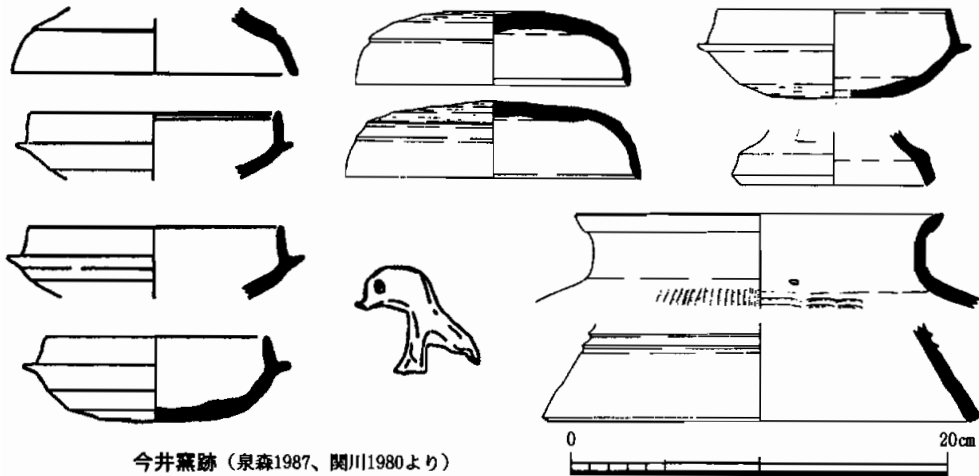
勢野・辻ノ垣内窯跡 (権考研1996より)



平野窯跡群 (眞園1974より)

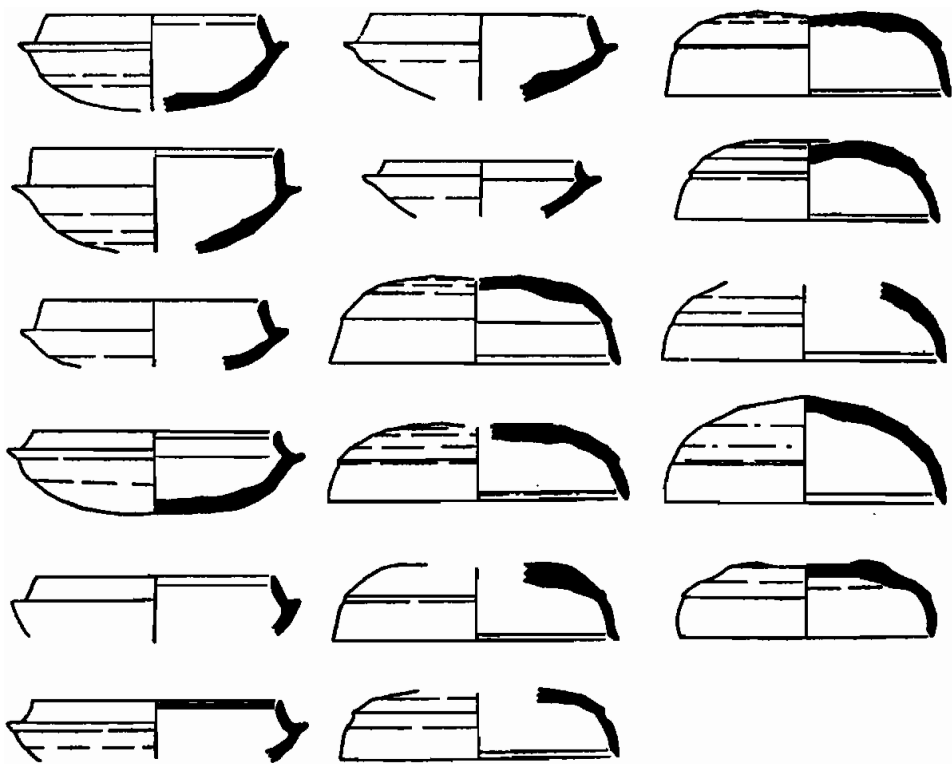


平野 1号窯跡 (千賀1982より)

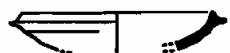


今井窯跡 (泉森1987、関川1980より)

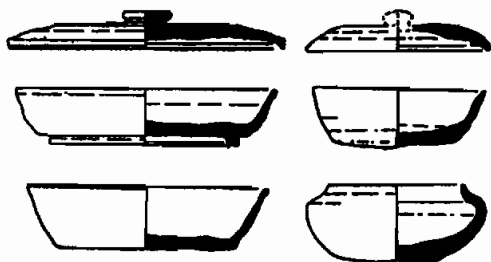
窯跡資料(6) 各文献より一部改変



荒木神社裏山窯跡群（泉森1987より）



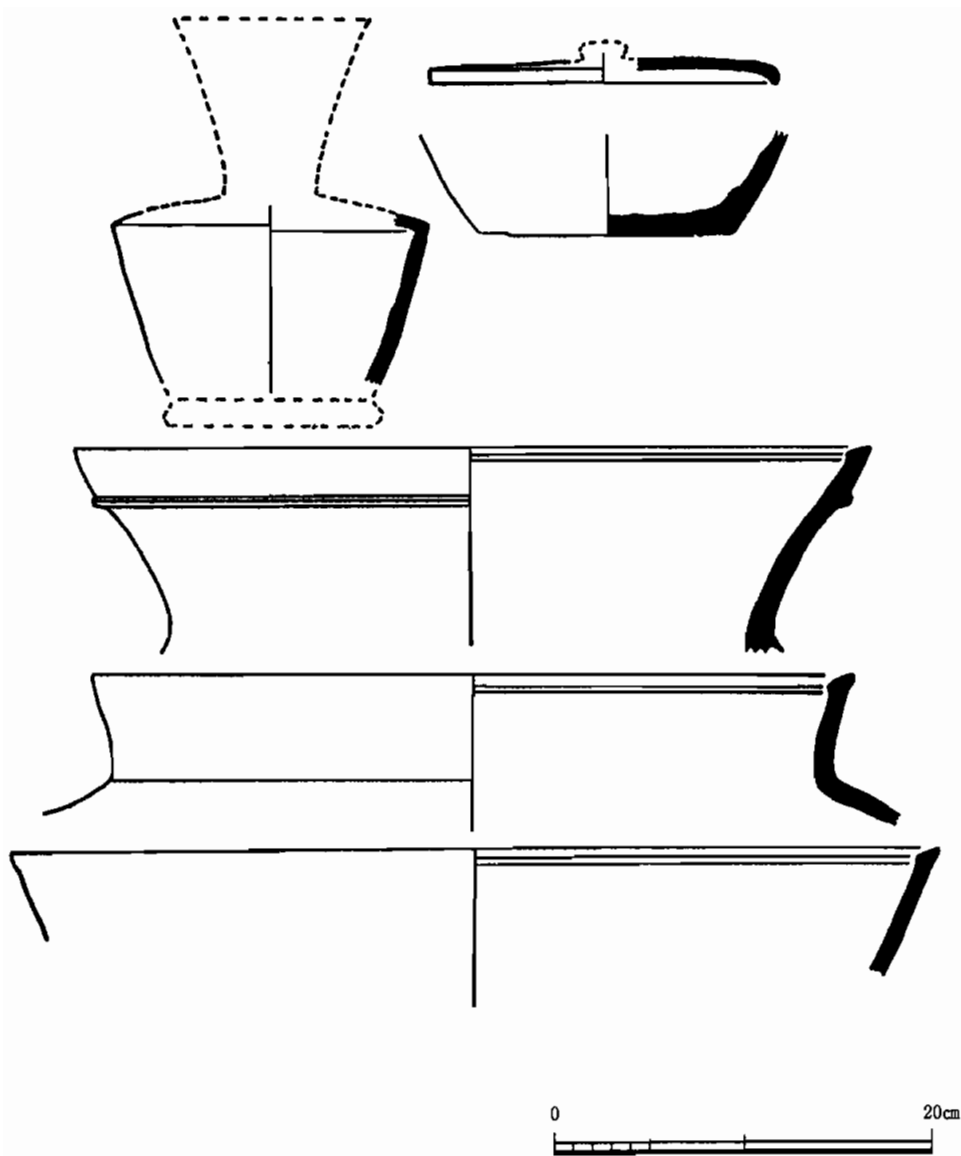
天神山窯跡（泉森1987より）



荒坂窯跡（泉森1987より）



窯跡資料(7) 各文献より一部改変



窯跡資料(8) 南仙山窯跡 (泉森1987より一部改変)